

国宝「立正安国論」を納める厨子の塗りを担当 布清信仏壇店（七尾）

布清信仏壇店は、日蓮聖人の遺文「立正安国論（国宝・日蓮聖人真筆）」の巻物と「観心本尊抄」の帳面を納める厨子を制作、日蓮宗大本山中山法華経寺に納めた。

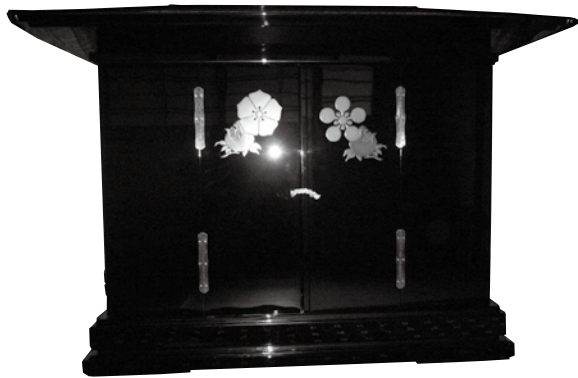
この仕事は中山法華経寺第二祖日高上人七百年遠忌大法要に合わせて発注されたもので、中山法華経寺貫首新井日湛上人の発願によるもの。

中山法華経寺は加賀前田藩と所縁が深く、この地方の職人が「立正安国論」の修復や巻物への表装などを行ってきた。また、新井貫首ご自身が能登の出身で親交のある布清信仏壇店への発注となった。

木地は江戸指物職人が制作し、「能登の漆を」という新井貫首の想いを実現するため輪島の漆掻き職人古地喜太郎氏（大正15年生）が輪島で採取した漆を上塗りに使用。布清信氏が総布着せ、五回の下地塗り、中塗り三回、上塗り一回を行い、その後、総蠟色を施した。扉には前田家家紋の剣梅鉢、寺紋である土岐桔梗、左右には鬼子母神のシンボルであるザク口の蒔絵が輪島市の蒔絵師山崎晃櫻氏によって描かれた。

厨子完成まで、新井日湛上人は何度も能登まで足を運び、工程を見守ってきた。

布清信氏は「国宝を納める厨子制作の栄誉にあずかせて頂いたことは、大変畏れ多いこと。心身を賭して制作にあたりました」と語る。



完成した厨子
国宝「立正安国論」と「観心本尊抄」が納められる



塗りを行う布清信氏
上塗りには地元輪島の漆が使われた



中山法華経寺 5月17日 中山法華経寺第二祖日高上人七百年遠忌法要
厨子は左に見える。「立正安国論」「観心本尊抄」は右の桐箱の蒔絵箱に納められている。蒔絵箱は加賀蒔絵師の五十嵐道甫（?～1678）の手になるもの。